

我が国心理学者による「児童の相談」の始まりと展開(前編) : 児童教養研究所(目黒)を巡って

著者	山崎 史郎
雑誌名	熊本学園大学論集 『総合科学』
巻	22
号	1
ページ	83-99
発行年	2017-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00002969/

我が国心理学者による「児童の相談」の始まりと展開（前編） －児童教養研究所（目黒）を巡って－

山崎 史郎（熊本学園大学 社会福祉学部教授）

The beginning and Development of Child Guidance Services and Consultation by Japanese Psychologists (1)

Shiro YAMAZAKI

はじめに

我が国における「児童の相談」は明治の近代化以降、社会における「家庭」の出現など家族像が劇的に変化し、家庭教育への期待も強まったことを背景に専門の事業として始められることとなった。「児童の相談」には医師、教育者、児童福祉関係者らが加わったが、心理学者も大きな役割を担った。その心理学者で先駆けとなったのは久保良英である。久保は 1917（大正 6）年、北垣守による児童教養研究所（目黒）*で研究部長として活躍し始める。この研究所は多くの事業を行い出版物も多数刊行したが、設立の地である東京目黒権之助坂下からわずか 2 年余りで姿を消してしまう。当時の記録が散逸して、その実態について解明されていないことも多い。創設者北垣守の人物や経歴もこれまで全く知られておらず、その思想も解明されていなかった。我が国心理学者による「児童の相談」がその場と機会を得てどのように始まり展開していったのか。今回、筆者は従来、利用されていなかった、我が国初の児童教養研究所の創設者である北垣守の親族宛書簡や副所長を務めた児童文学者巖谷小波の日記を閲覧し、また創設者の父北垣国道の日記『塵海』ほかを参照することができた。

本研究では我が国における心理学者による「児童の相談」の始まりと展開について、まず前編でそれが芽生えた児童教養研究所（目黒）の性格、事業の展開とその意義を、後編で我が国心理学者による「児童の相談」の始まりとその後の展開について久保良英の初期の仕事を中心に明らかにしていきたい。

(1) 我が国心理学者による「児童の相談」：先行研究から

「児童の相談」の始まりと展開については教育、児童福祉分野で研究されている。これまでにわかっていることを簡単にまとめると、次の通りである。

我が国の「児童の相談」は医師三田谷啓により始められた。児童教養相談所（西片町）がそれである。三田谷は独で治療教育学を学び、帰国して我が国初となる治療教育院の設立を夢見て奔走した。残念ながら適当な土地と支援者が見つからず、一旦これを保留して相談

機関を開くこととした。1915（大正4）年のことである。医学者富士川游によって当時の児童学会事務所に「児童教養相談所（西片町）」が置かれ、三田谷啓が主任となった。これが我が国初の「児童の相談」機関である。ちなみにここでの「児童教養」とは現在使われている「教養」という語義とは異なり、文字通り子どもを教え養うという家庭教育、養育を指す。明治の近代化以降、家族意識が大いに変化してきたが、旧習や迷信によらず近代的教育観、養育観により子どもの健全な成長を図ること、家庭での躾や正しい保健知識に裏打ちされた家庭教育、養育を指す。この相談所は児童学会事務所（富士川の右腕として事務を取り仕切っていた医師小田平義の私邸：現在の東京都文京区西片町）にあり、独立した施設を持たなかった。また料金も非常に高かったのではほとんど利用されなかったと言われている。三田谷啓の治療教育学機関設立の願いは叶わず次善の策として児童教養相談所（西片町）が開設されたが、相談機関としては成功しなかったと言える。

続いて北垣守による児童教養研究所（目黒）が開設され、三田谷はこれに研究部長として参加する。この研究所には児童相談所が付設されていた。我が国で最も早く「児童の相談」を行った専用施設を持つ機関こそ、この「児童教養研究所（目黒）」であった。そして、そこに心理学者久保良英が参加する。我が国心理学者による最初の「児童の相談」はこうして、久保良英により児童教養研究所（目黒）において始まった。1917（大正6）年のことである。

この研究所について詳しく解説しているのは安田生命社会事業団編（1969）『近代日本の児童相談』、松本園子（1985）『児童教養研究所講習録第1回、第2回』の解説、そしてこの研究所を主題として取り上げた村田恵子（1997）「北垣児童教養研究所について」である。いずれも詳しくこの研究所のありようを検討しており、非常に参考になる。

一方、心理学分野からの研究は非常に少なく、下山（2001）らがわずかに触れているのと、古浦（1974、1982）、鈴木・井上（2001）にここで活躍した久保良英に関しての記述がある程度である。

（2）北垣守の人と経歴、思想と「児童教養研究所（目黒）」の構想

1）北垣守の人と経歴

まず児童教養研究所（目黒）がどのような経緯で設立され、どのような理念、性格を持っていたのかを明らかにしたい。創設者北垣守については児童教養研究所（目黒）の発行する雑誌『児童』に記事がありその活躍ぶりが知られるが、それまでの学歴や職歴、また研究所退任後の足取りなどは全く知られていない。琵琶湖疎水を開削したことで有名な第三代京都府知事北垣国道の次男でありながら全く解明されておらず、児童教養研究所（目黒）の設立理念の背景がわからなかった。本論文では従来活用されていなかった資料、すなわち父であり第三代京都府知事である北垣国道の日記『塵海』（塵海研究会編2010）、北垣守が最初に研究所設立の相談をした児童文学者巖谷小波の『巖谷小波日記』（複写版：明治大学和泉図書館）、北垣守はじめ一族の書簡（横山大観記念館所蔵）を用いてこれを明らかにしたい。

北垣守は琵琶湖疎水を開いた第三代京都府知事北垣国道の次男である。国道は1881（明治14）年-1892（明治25）年の間、京都府知事を務めた後、北海道庁長官となった。明治維新での勲功を認められて男爵の爵位を与えられ、貴族院議員を務めた。国道には四男三女がお

り、長男確は日本画家北垣静處、三男旭は海軍軍人から漁業会社社長、四男元は北海道農学校で学び一時、守の研究所を手伝った。長女は琵琶湖疎水を設計監理した、後の東京帝国大学教授田邊朔郎に嫁ぎ、次女、三女もそれぞれ著名な学者に嫁いでいる。

守は幼少期、京都で過ごし、16歳で京都府京都商業学校に進んだ。4年制の上級学校であるが当時の身分制で卒業生名簿のほとんどが平民と表記され、一部士族出身の者が見られたものの、華族は守一人であった（京都府京都商業学校編 1901）。20歳でここを卒業し、東京に出た。

21歳で東京の近衛歩兵第一連隊第5中隊に入隊する。当時、徴兵期間は2年であったが、上級の商業学校卒の資格があったため1年となり、志願先も自ら選べた。除隊後、一旦京都に戻り、後に3か月の見習士官教育訓練を受ける。

再び京都に戻った後、父国道は守の就職を心配し、兼松房次郎に依頼した。兼松は後に商社経営者として成功するが、当時オーストラリアとの羊毛貿易でまさしく発展していこうとするとところにあった。父国道が守の「商業の道で世界に飛躍したい」という夢を叶えられるようにと、依頼したものである。この時、父国道は兼松房次郎とは初対面であったという。誠に慧眼というべきで、就職を世話してくれる知り合いはいくらでもあったであろうに、守の夢が叶うようにとの父の思いであった。ただ、残念ながらこの話が実現した形跡はない。

この後、守は京都府知事の後、北海道長官を務めた父国道にゆかりの北海道小樽区で小樽銀行の行員となる。この時25歳、妻シマと暮らした。ここに至るまでに、農商務省在外研修員として最初の外遊をしている。

1904（明治37）年、召集されて北海道から京都に帰り、陸軍大津営所に入営する。その後、陸軍副隊長として日露戦争に出陣する。しかし、足に銃弾を受けて負傷、一時帰国して療養する。回復後、再び参戦したが、1905（明治38）年、病氣（脳病と脚気）で後送され除隊、その後、京都で療養した。結局、1908（明治41）年、31歳で小樽銀行も辞することとなった。

1910（明治43）年、今度は日英産業会の事業により33歳でロンドンに留学、語学学校に通う。日英産業会は1902年前後に設立された。守の留学のこの時期はちょうど、ロンドンでの日英博覧会の開催時期に当たる。

1916（大正5年）年1月、守39歳の折りに、父国道が死去した。これを機に20年来の夢を実現すべく「児童教養研究所（目黒）」設立に奔走し、遂に翌1917年5月5日、開所式を迎えることができた。

守の学歴、職歴を見ると、京都府京都商業学校を選んだ時点で当時の華族としては異色であったといえる。兄確は同志社英学校、転校して慶応中学から京都市立工芸美術学校卒。弟旭は学習院から米国アナポリス海軍兵学校、同じく末弟元は札幌農学校（現北海道大学）に進んでいる。守は商業を通じて世界に羽ばたきたいと願っていた。裕福な家庭を基盤に兄弟それぞれ留学、外遊を経験しているが、若き守も弟旭への手紙で差出人である自身を「世界商王」と遊び心で称している。東京に出て銀行員として勤め、農商務省在外研修員として欧州視察を経験した。小樽銀行行員時代にはさらに意欲を高め、地元で学校に通い卒業したらロシアのウラジオストックに来るつもりであると語っていた。日露戦争では果敢に戦ったが負傷して除隊、結局、銀行も続けられなかった。しかし再び意を決し、日英産業会の事業で

英国に渡り語学学校で学んだ。このように若い頃の夢を実現すべく真摯に取り組んだものの、時代の大きな流れの中で夢は叶わず、結局は京都の父の邸宅にあって秘書の役割を果たしていた。

守は早くに結婚し、子宝に恵まれた。幼くして亡くなった子どももいるが、二男七女まで知られている。子煩悩な父であったと評されている。ロンドン時代にはエレン・ケイ (Key,E.) の思想にも触れており『児童の世紀』の翻訳出版前に現地でそれを知っていた (エレン・ケイ 1900, 原田実訳 1916 大同館書店)。守の文章に「エレン・カイ」という表記があるが、翻訳はすべてエレン・ケイとなっている。英語の綴りは Key であるから通常であればキーと読むべきところである。北欧出身者ではこれをケイと読むのであるが、ロンドン訛りでカイとなっているものである。

守は 1877 年 (明治 10) 年の生まれで、育ったのは郷土の家系であった。父国道は幕末に命を賭して兵を挙げ (生野義挙)、破れて切腹まで覚悟した。長州藩に身を寄せた後、戊辰戦争に参戦した。維新後、県令、府知事、北海道長官と、地方官吏として頂点まで上り詰めた。守はこうした中で近代明治人として歩んだ。父を尊敬し、酒に溺れようとする兄と素行上、様々な問題を引き起こす弟を諫め激励し、自身は気概を持って生きようとした。まだ育ち始めたばかりの近代日本の行く末を一国民として案じた。守の児童への関心は明治時代の「児童研究」のそれを汲んでいる。明治期に蝦夷 (北海道) から樺太、そして台湾へ圏域、領土が拡大した。民族や人種の骨格、体型はじめ生物学的特質、民族の言語や風習など文化人類学に関心が集まる。生物学的特質に関して進化論、優生学の影響も見られた。エレン・ケイにははっきりと優生学思想の影響が見られるが、守はこれら思想の影響を受け児童の教養の意義を強く意識したのである。

2) 児童教養研究所 (目黒) の構想

父国道の死を契機に、守はこれまで自分がこれに賭けてきたというほどのものを持ち合わせなかったことから一念発起した。その年の秋には個人で長らく収集してきた展示物を供覧する「南洋北海展覧会」を銀座の保険会社の 2 階ホールで開いた。我が国の領土拡大 (樺太、台湾)、その地の民族への文化人類学的関心など、社会の流れに沿ったものである。また文明化された人間の理解にあたって、当時の言葉で「土人」、そして「子ども」の研究が有用とする、進化論に影響された世界思想に負っていることがわかる。この時期までに、大規模な人類学的博覧会、児童博覧会が開催されていて明治からの富国強兵の思想の流れがあるのであるが、北垣守の博覧会は小規模とはいえそれに倣ったものであり、多くの明治時代人と一致する心情から来るものである。

これに先立ち、守は研究所の構想を児童文学者として著名な巖谷小波に相談した。巖谷と守の接点はわかっていない。北垣国道が京都府知事を辞して北海道長官に転出した直後に、巖谷小波は東京から京都の日出新聞社記者として着任した。守と巖谷小波の両者に個人的接点はなくとも巖谷は前府知事のことを知っているし、守も国民的児童文学作家である巖谷小波を知っている。『桃太郎主義的教育』(1915) など、著書、新聞記事に触れていたことも想像できる。巖谷小波の日記には 1916 (大正 5) 年、北垣国道の死後、その秋に数度、守と会い食事をしたなどの記載がある。この日記は本当に簡単な備忘録で、詳しい内容や印象など

は書かれていない。守は巖谷小波に児童教養研究所設立の相談をし、賛同を得て大いに意を強くした。学術上の父を得たような思いだとまで言っている。父国道が亡くなってしばらくしての一念発起であった。

1916（大正5年）9月17日、読売新聞朝刊5ページには、「銀座コダカラ」開所を伝える記事が掲載された。合わせて、研究所の計画記事で「尚、氏（守）は巖谷小波氏を総顧問として、近く児童研究所を特設し、玩具部、歴史地理部、図書部、衛生部、運動部その他15部の部局をもおき、15年計画にて大成を期するよし。」と報道された。ここで「銀座コダカラ」とは、後に児童教養研究所（目黒）の理事として活躍する成澤金兵衛の経営する「子育て用品専門店」である。巖谷小波が関わっていた三越百貨店子供研究会のアイデアを実現していく子供用品売場の、専門店版であった。銀座コダカラは銀座紺屋町の角に店を構えた。

その新聞記事に次いで同11月11日にも読売新聞朝刊5ページに記事が掲載された。それは研究所の体制を報じるもので、「児童の幸福を増進し健全なる国民の根底を作る。」とされた。研究所の構成も詳しく報じられている。すなわち、

- 第1部 動植物部
- 第2部 歴史地理部
- 第3部 理工部
- 第4部 陸海軍部
- 第5部 文芸経済部
- 第6部 衛生部
- 第7部 体育部
- 第8部 図書部
- 第9部 娯楽部
- 第10部 保護者部

前回報道の15部構成より、5部縮小されているところが注目すべきであるが、児童教養を研究するという時、児童をあらゆる面から総合的に研究する児童学の理念から考えるとこれだけの関連部門が必要とされた、ということであろう。しかし、どう見ても実際的ではないと思われる。開設時の実際の組織は後に示す。

1916（大正6）年12月、北垣守は「南洋北海博覧会」を開いたが、これを報じる記事で「児童教養研究所」が主催であると、この名称が初めて用いられていた。

さて、守は目黒権之助坂下に広大な土地を求め、木造2階建ての建物を新築した。簡素ではあるが100名を収容するホールを2階に用意した。翌1917（大正6）年春に竣工し、5月5日に晴れの開所式を迎えた。その様子は研究所の雑誌『児童』、新聞各紙、そして巖谷小波の日記にも記されている。大勢の観客、来賓を集め盛大に行われ、守、人生最良の一日であった。

開所当初（1917.5.）の組織は、先の研究体制の計画からすると大いにスリム化されている。そして、1916年（大正5年）9月17日、読売新聞朝刊、同年11月11日、読売新聞朝刊では見られなかったが、衛生部に児童相談所が追加されている。（1917（大正6）年、5月

6 日読売新聞朝刊)

児童教養研究所組織（1917（大正6）年開設時）

総務部

経理部

研究部 第一部 学術

第二部 実地

実行部 出版部 『児童』の発行

講演部 講演会、保護者会、子供会

衛生部 児童相談所

製造及び販売部 児童教養品の製造

守は研究所のスポンサーではなく、理事長として運営の前面に立った。専門の研究者の企画に財政支援を与えたものではなく、守自身の関心、理想を実現しようとしたものであり、児童について見識のある巖谷小波に相談もした。しかし、両者ともアカデミズムにおける児童の研究とは縁がない。研究計画も0歳から始めて15歳まで順次15年かけて研究するもので、理念は壮大であるが实际的ではない。

この計画に最初に関わった専門の研究者は、医師三田谷啓である。三田谷の自伝を見ると児童教養相談所（西片町）についての記載はあるものの、児童教養研究所（目黒）については一行の記述もない（三田谷1931）。三田谷の人生には独留学、次の大阪市児童相談所開設、三田谷治療教育院設立など大きなイベントが並ぶ。その中で、この研究所が占めるウェートは大きくなかったのだろうと推察される。ただし、衛生部に児童相談所が組み入れられているのは三田谷のアイデアであり、我が国初の専用施設を持つ児童の相談所はこうして出発した。もちろん、専用の施設というのは研究所の建物全体を言うのであって、具体的に相談室、観察室、遊戯室の設備を備えたというものではない。そのようなものとして設計されておらず、いわば「児童教養」を研究する研究所に独の最新の治療教育学の知識を持つ三田谷のアイデアが無造作に投げ入れられたと言えるのである。

（3）研究所の出発：その事業の展開

1) 研究所の組織

研究所で自立した研究者と呼べるのは発足時には三田谷啓ただ一人であり、1ヶ月遅れてようやく心理学者、久保良英が参加して研究部長二人体制となった。研究所の人的組織について実際はどのように進められたのであろうか。この事情についても、明らかにできる十分な資料がない。大正5、6年頃の児童研究、児童学の中心は1902（明治35）年に結成された日本児童研究会であるが、雑誌『児童研究』はそれに先立ち1898（明治31）年に創刊されている。1912年には日本児童学会に改称され、地方部会の組織化が行われていった。

発足当時の児童教養研究所（目黒）の理事、役員顔ぶれを見ると、大きく分けて北垣人脈（父国道や北垣一族とのつながりのある人々）、巖谷人脈（児童分野で幅広く活躍していた巖谷小波とのつながりのある人々）、そして最後は児童研究人脈（富士川游や高島平三郎からのつながりのある人々）からなる。

実際に研究所を動かしたのは、発足時には理事長と副所長、そして理事3名、さらに1か月後に久保良英が加わったので、計6名であった。

表1 児童教養研究所（目黒）役職者（理事長、副所長、理事）

理 事 長	北 垣 守	
所 長		（空 席）
副 所 長	巖谷 小波	
理 事	成澤 金兵衛	
理 事	黒田 朋信	
理 事	三田谷 啓	
理 事	久保 良英	1917（大正6）年6月から

ここで理事成澤金兵衛は後に「アサヒグラフ」「アサヒカメラ」などを創刊、編集したフォトジャーナリストで、当時は銀座で児童教養百貨店『コダカラ』を経営し、児童教養研究所（目黒）の事業と連動させようとしていた。児童教養用品とは育児用品で、この児童教養百貨店『コダカラ』は三越百貨店の子ども用品販売を特化したようなものである。理事黒田朋信は建築美術の評論家、著作家で、後に三越百貨店に入社しPR誌の編集にあたった。いずれも巖谷小波の人脈である。

役員は名誉顧問、理学博士男爵菊池大麓が最上位に立った。菊池は貴族院議員、枢密顧問官である。巖谷小波の父巖谷一六、北垣守の父、北垣国道のいずれも貴族院議員を務めたなどのつながりがあって名誉顧問に就任していると思われる。顧問についても有識者を初め、錚々たる人物を配している。他に相談役若干名を置いた。

表2 児童教養研究所（目黒）顧問

	顧 問		
中央部	医学博士	唐澤 光徳	（東京医科大学講師、慶應義塾大学教授、小児科医）
		高島 平三郎	（東洋大学教授、後学長：児童研究）
		棚橋 源太郎	（東京高等師範学校教授：理科教育、児童研究）
	工学博士	塚本 靖	（東京帝国大学工科助教授、後教授。巖谷小波の三越児童用品研究会に参加）
	文学士	倉橋 惣三	（東京女子高等師範学校教授）
	文学博士	松本 亦太郎	（東京帝国大学教授）
	法学士	福田 秀五郎	（三井銀行）
西 部	工学博士	田邊 朔郎	（京都帝国大学教授：北垣守義兄）
	法学博士	田島 錦治	（京都帝国大学教授：義兄田邊同僚）
	法学博士	跡部 定次郎	（京都帝国大学教授：義兄田邊同僚）
	医学博士	木下 東作	（大阪医科大学教授：児童研究）
	工学博士	下村 孝太郎	（後、同志社社長（総長）。北垣守義兄）
	医学博士	平井 毓太郎	（後、京都帝国大学医科教授：父北垣国道主治医。）
南部	医学博士	伊東 祐彦	（九州帝国大学医科大学学長。小児科学）
	医学博士	榊 保三郎	（元九州帝国大学医学部教授。精神医学）
北部	農学博士	南 鷹次郎	（札幌農学校、後、北海道帝国大学教授。巖谷とともに渋沢栄一渡米実業団に参加）

1917 (大正6) 年5月5日、すでに研究所の建物は完成しており、研究所名で博覧会を別会場で開催するなどしていたが、五月の節句を吉日として華やかに開会式を執り行った。その様子は新聞にも報じられ、研究所の親向けの雑誌『児童』1巻1号にも詳しく掲載されている。

2) 研究所の事業

研究所の事業は多岐に亘るがその中核となるのが「児童教養の研究」であり、三田谷と久保が担当した。成果は『児童研究所紀要』として開所1年後、1918 (大正7) 年5月に第1巻が発行されている (児童研究所編 1918-1936)。ここで名称が変更になっている点については、後に解説する。この雑誌は児童教養研究所 (目黒) が廃止になった後も久保良英により刊行が続けられ、第17巻、1937 (昭和12) 年9月まで出版されている。久保や三田谷らの論文、知能検査に関する研究論文などが掲載されたが、児童教養研究所 (後に児童研究所に名称変更) で目黒の地において出されたのは、第1巻と第2巻のみである。当歳から15歳まで、毎年順次研究していくとした北垣守の構想は取り入れられず、児童の知能検査、連想作用、算術的能力の研究など久保の研究、さらに知能と身体との関係、「細民学童」の生活状態、心身の発育状況に関する三田谷の研究が掲載されている。三田谷の在籍期間がわずかに11か月と短いせいも、久保との共同研究が行われた形跡はない。

研究所の大きな事業は「児童教養講習会」である。全国から百人近い参加者を得て、表3のとおり3回開かれ、最初の2回の講演録は出版されている。著名講師陣による最新の児童

表3 児童教養講習会の講師と演題

第1回児童教養講習会 1917 (大正6) 年8月	
巖谷 季雄	「童話の扱い方」
二階堂トクヨ	「児童の体育」
乙竹 岩造	「児童と学習」
唐澤 光徳	「児童の養育」
吉田 熊次	「児童と徳育」
永井 潜	「母親保護」
黒田 朋信	「児童の趣味」
久保 良英	「児童の連想」
三田谷 啓	「神経質児童の取扱」
第2回児童教養講習会 1917 (大正6) 年12月	
巖谷 季雄	「児童文学と国定教科書」
石原 喜久太郎	「児童衣服の衛生」
河野 清丸	「自学的態度の要素及び其養成法」
高島 平三郎	「児童精神の発達」
久保 良英	「児童の供述」
倉橋 惣三	「児童生活の考察」
近藤 乾郎	「学齡児の栄養 附弱者強健法」
澤柳 政太郎	「小学教育」
北 豊吉	「児童の運動」
湯原 元一	「児童保護に就て」

第3回児童教養講習会 1918（大正7）年8月	
井上 哲次郎	「国民道徳と児童」
三宅 鑛一	「児童の変質」
太田 孝之	「小児病と家庭看護法」
野田文部督学官	「児童の訓練」
鳩山 春子	「学校と家庭」
黒田 朋信	「児童と色彩」
久保 良英	「教育的測定」

教養に関する講演を聞こうと、全国から人が集まった。多くが母親であり、また教師であった。

日曜日に開かれる、単発の講演会である「日曜講演会」は通算22回開かれている。子どもたちは併設の児童楽園で遊び、親はこの講演会で興味深い話を聞くことができた。

さらに親向けの啓発誌『児童』は表4の通り、月刊で発行されている。後で述べるように、研究所の組織改革で雑誌名も『児童』から『子宝』に変更になった。『児童』の誌名で11冊、「子宝」の誌名では3冊発行されている。

表4 雑誌『児童』発行年月

1917（大正6）年

5月	1巻1号 五月号
6月	1巻2号
7月	1巻3号
8月	1巻4号
9月	1巻5号
	1巻6号 臨時増刊 懸賞発表号
10月	1巻7号
11月	1巻8号
12月	1巻9号

1918（大正7）年

1月	2巻1号 新年倍大号
2月	2巻2号
3月	2巻3号 『子宝』 三月号 新入学準備号
4月	2巻4号 『子宝』 四月号 早教育問題号
5月	2巻5号 『子宝』 五月号

他には児童楽園の運営があり、広大な土地に地球池（池に東半球、西半球の地形を島のよ

うに配した）、小動物、植物などの飼育、栽培を展示した。工学博士塚本靖（東京帝国大学工科助教授、後、教授）の設計した「ツミキノイヘ（積木の家：子どもが中に入って遊べる可愛らしいデザインのミニチュアハウス）」などもあった。

講演旅行は巖谷小波を中心に地方都市を回り、講演会とお伽噺の口演を行うものである。北海道や関西方面への講演旅行の記録が巖谷小波の日記にある。それぞれ1週間ほどかけて

各地を回り、学校の講堂などに多くの親、教師、子どもたちを集めた。久保良英も参加して講演し、巖谷小波はお伽噺をした。これは口演童話と言われるもので、久留島武彦らとともに広めた、童話の読み聞かせの活動である。

1917（大正6）年9月25日（火）、北垣守は次女、緑（みどり）を失う。初めての北海道講演旅行から帰り着いた日の夜のことであった。翌日、葬儀が執り行われた。巖谷小波の日記にもその間の様子が記されている。雑誌『児童』にも紹介されており、次女緑は子ども樂園のために貰った小遣いを貯めていて、いつか寄付するのだと話していたという挿話が葬儀で紹介され、人々の涙を誘ったとある（「児童」1917 第1巻8号）。

（4）児童教養研究所（目黒）の相談活動

児童教養研究所（目黒）に児童相談所が付加されたのは、三田谷の意向である。すでに児童教養相談所（西片町）での経験を持っていたが、この西片町の相談所自体は、児童教養研究所（目黒）と並行して運営されていた。雑誌『児童研究』には、1915年5月から1918年3月、すなわち三田谷啓の大阪市役所への赴任までの間、広告が掲載されている。ここからこの児童教養相談所（西片町）は富士川游に支えられた三田谷啓の相談所であったことがわかる。児童教養研究所（目黒）の開設準備以前にすでに運営されており、三田谷の治療教育院構想が独留学時に膨らみ帰国後、東京で実現を目指すがそれには至らないまま児童教養相談所（西片町）として取り敢えず開設され、そして別のルートで開設された児童教養研究所（目黒）にもうまく児童相談所が組み込まれたものと言うことができる。もう一人の研究部長である久保良英は児童教養研究所（目黒）の開所後に加わっており、この児童相談所の構想とは直接関わりが無いと考えられる。

久保は米国クラーク大学に留学していたが、指導者であるホール, G.S. は草創期の精神分析理論に関心を寄せ、フロイトらを米国講演旅行に招待するなどしていた。講義でも毎日のように精神分析の話題が出たという。久保は我が国初めての精神分析理論の紹介書である『精神分析法』を帰国後間もなく1917（大正6）年、丁度この時期に出版している。またこれに先だって、我が国でも精神分析の紹介論文が書かれている。また、盟友である倉橋惣三の論文「心理学的臨床につきて」（倉橋1911）には、久保は留学前に触れている。倉橋論文は米国の臨床心理学の進展についての論文を翻訳紹介したもので、様々な分野に臨床心理学者が進出し、研究が隆盛であることを紹介したものである。これらから考えると、児童教養研究所（目黒）で医学分野での三田谷の活動に直接触れたが、久保自身の「児童の相談」に関する知識、関心はそれ以前からのものであったと考えられる。

残念ながら「児童の相談」に関する基本情報、例えば相談件数、男女比、年齢層、主たる問題、処置について一切報告がなく、事例研究として詳しく記述されたものも見当たらない。研究所の一部門であり公式に事業を進めているにもかかわらず、数多くの研究所出版物の中に一切報告を欠いているのは、他の事業とのバランスを著しく失っている。

三田谷の姿勢には強い臨床志向が感じ取れる。障害のある子どもへの関心、「細民学童」の生活状態に関する論文執筆など「児童の相談」への傾倒が見て取れる。児童虐待問題にも早い時期に触れている。一方、久保は第一にはやはり児童心理のアカデミズムの研究者であり、法則定立的研究への姿勢がある。例えば研究所が開いた「児童教養講習会」で全国から

集まった母親、教師らに向けた講演では、他の多くの講師が聴衆の関心を考えて身近なテーマを選んでいった。しかし、久保は子どもの連想研究の成果を披露している。学問的には興味深い、一般の母親や教師にとってはどうであったろうか。久保はまず基本となる学問的知識がなければ「児童の相談」も根柢の薄いものになると考えていた。この相談分野の資料が発表されていないのは、なお報告すべき一定の基準を満たしていないとの考えがあったのではないかと推察される。もちろん、久保が我が国心理学者で最初に「児童の相談」に取り組んだ人であることに何ら揺らぎはない。

（5）児童教養研究所（目黒）の名称及び組織変更、そして撤退へ

1) 名称及び組織変更

児童教養研究所（目黒）は1918年（大正7年）3月、開設の翌年に組織変更を行った。まず実行部を改称、独立させて「子宝倶楽部」とし、成澤金兵衛が主幹となる。児童用品の販売を児童教養百貨店である銀座コダカラに一本化して継続する。出版では雑誌『児童』の誌名を『子宝』に改題し、継続発行するが（2巻3号から）、これは銀座コダカラとの広報宣伝の連携を考慮したものである。児童樂園については北垣守が担当する。研究上及び経営上の必要によりこの年の4月から研究所の建物を使って附属幼稚園を経営するが、これは久保良英が担当している。研究所の組織と人員が整理され、3方面に分かれて活動することになった。これは理事長北垣守の財政上の理由によると言われている。元々営利事業ではなく、児童教養研究所規則第4章経済第12条には、「本所の経済は設立者の出資を以てす。」とある。雑誌販売、講習会参加費、学術刊行物、児童用品の売り上げ、児童樂園のわずかな入園料では多くの研究員、事務職員を雇い、研究所を維持管理することはできないのである。

守の父、北垣国道は官吏であり北海道長官を務めた。その前に最初に北海道で榎本武揚の下で働いていた折りに、共同して小樽市（当時小樽区）の大規模な官有地払い下げを受けて、町の開発に当たった。榎本はそこから生じる益金を函館戦争で共に戦った部下の厚生に充てたといい、いずれも町が発展した後、土地を国庫に寄付したという。地元資産管理会社（北辰社）を置いて開発の事業に当たっていた。北垣国道は京都の鴨川べりに広大な屋敷を構えた。国道晩年の日記には出費多端を嘆く記載があるが、総じて裕福であった。守は次男であるので家督は長男（北垣確）が相続している。国道死後、資産管理会社北辰社は地元経済人に分割譲渡されていたが、確は高額納税者として新聞に掲載されており（時事新報記事1916）、一族の家業が傾いたということはない。しかし、発足当初、研究所職員7名、事務14名、試補2名、雇1名という陣容であり、事実上、研究能力があったのは三田谷と久保の両部長長だけであったとすれば、研究所として放漫な運営であったと言われても仕方がなかったであろう。この時期に三田谷は大阪市に移り初代の児童課長となって、初の公立児童相談所開設準備に当たった。理事黒田朋信は辞して三越百貨店の広告部門に移った。研究員、事務職員を整理し、久保は主事となって巖谷小波と、無給で手伝ってくれる後輩西澤頼応や家族の助けを得て研究所を継続した。

久保は組織変更と同時に名称を「児童教養研究所」から「児童研究所」と変えた。北垣守が願っていたのは「児童の教養」を研究する研究所であり、世の母親たちへ立派な子育てをしてもらいたいという啓発を進んで行う機関であった。他方、久保良英が行いたいのは、

「児童の研究」であり、児童の教養の知識や助言、相談の基礎となる児童心理、教育心理の研究であった。名称変更の理由について久保は、「児童教養研究所」という名称はやや長い、児童を預かったりする施設と間違えられるなどの理由を挙げているが、当時、児童学の隆盛が沈静化した後、子どもについての雑多な学ではなくアカデミックな研究法に基づく児童心理の基礎研究を積み上げることこそ急務であると久保は考えていた。名称変更は、そのような思いがあつてのことなのである。

2) 久保良英の活躍

このような組織変更を行って事態に対処しようとしたが、結局、北垣守は1918(大正7)年7月、最終的に退任した。その運営は巖谷小波の支援を受けながら、久保良英一家の手によって受け継がれた。北垣守が理事長として活躍したのは、開所式からわずか1年2か月、その前の博覧会から数えても1年8か月ほどであった。

ここですべて撤収するという選択もあつたであろうが、久保良英は誠実で粘り強い人柄により、研究所を維持した。研究所再建のため巖谷小波が奮闘し、多くの心ある人に訴え、拠金してもらった。巖谷小波自身を筆頭に、渡辺勝三郎(内務省官僚)、朝吹一族:朝吹常吉(三越から帝国生命保険。巖谷つながり)、朝吹磯(常吉妻、長岡外史娘)、朝吹栄一(常吉長男、木琴研究家)、朝吹三吉(常吉三男、慶応大学教授)、朝吹登水(常吉長女、翻訳家)、朝吹四郎(常吉四男、建築家)、朝吹正二。長岡護一(陸軍軍人長岡外史子息)、長岡護、長岡安藝、今東梅吉。福田秀五郎(三井銀行)らの人々であった。

そして北垣一族:北垣シマ(北垣守妻)、北垣慧美子、北垣弥生、北垣千鶴、北垣米子。また、小池國三(実業家、山一証券創設)らの名前もある。心理学者では青木誠四郎は学生時代から研究所に出入りしてずっと久保を手伝ってきた。城戸幡太郎(心理学者)も拠金の形で応援している。

また、安田善三郎(実業家、安田財閥)、加藤正治(法学者、東京大学名誉教授)、福沢駒吉(実業家、福沢諭吉孫)。他には、角田八百蔵、亀井茲常(宮内官僚)、盧百壽(キリスト教関係者)、杉野喜精(実業家、山一証券社長)の名前が挙げられている。

これらは趣旨に賛同してもらえたことと同時に巖谷小波の知名度や献身ぶりが人々の気持ちを惹きつけたものと思われる。

附属幼稚園は4月から開園していたが園児数が増えたため、2クラスにした。啓発雑誌『児童』改め『子宝』は同年5月で2巻5号を発行した後、停止していたが、この11月には新に『親の為』という一風変わった誌名で発行を始めた。これは巖谷小波の命名であり、当時、少年雑誌、児童雑誌が多数発行されていたために親向けの雑誌であることを明示するためにこう命名したという。この後、1919(大正8)年1月に第1巻第2号、4月に第1巻第3号を発行した。

1919(大正8)年6月、遂に目黒の児童研究所は閉鎖になった。幼稚園は現在の日出学園が現在地で土地建物ごと園児たちを引き受けてくれた。こうして、久保良英の児童研究所(目黒)は閉じられた。それでも、久保は児童研究所の名称を受け継ぎ、東京市芝白金三光町537番地の自宅で研究を続け、研究所紀要と啓発雑誌『親の為』を発行し続ける。この時期以降については、後編で扱いたい。

(6) 北垣守のその後

1918（大正7）年7月に児童研究所（目黒）の理事長を退任して以降、北垣守の足跡は全く知られていなかった。この後、守が児童研究、児童教養の分野で活躍した形跡はない。

1928年（昭和3年）5月3日、立命館大学弓道部新道場落成式が開かれる（立命館学誌1930）。田島錦治学長（大日本武徳会弓道範士八段）、跡部定次郎（大日本武徳会弓道範士）、が列席する。いずれも児童教養研究所（目黒）発足当時の西部地区顧問である。その列席者の中に北垣守師範の名前を見ることができる。北垣は教授ではなく弓道部の指導者であり、大日本武徳会誌での自身の連絡先に立命館大学を挙げている。田島、跡部の両教授は京都帝国大学法学部教授であった。立命館大学はそもそも京都の町で京都帝国大学法学部教授らの力を得て夜間制の京都法政学校として開設されたものである。創立者は京都帝国大学の事務局長であった中川小十郎である。北垣守の父、国道は自身、北辰流の剣術家であったので武道を大いに奨励し、京都府知事の立場から大日本武徳会の立ち上げに尽力して京都での役員を務めた。守自身は比較的遅く30歳ぐらいからであるが弓道を始め、やがて開眼した。1931（昭和6）年5月には、修練を積んでついに弓道範士に次ぐ弓道教士まで上り詰めた（大日本武徳会1937）。この頃、京都の国道以来の鴨川べりの自宅に暮らした。ちなみに田島、跡部両教授は京都帝国大学時代、人事の件で文部省と揉めた時にともに反対の運動を行った京都帝国大学教授田邊朔郎（北垣守の義兄）の、学部は異なるが同僚である。なお、弓道部自体は1942（昭和17）年に解散している。

1935年（昭和10年）には、弓道で指導を受けた人の追悼録に寄稿している（北垣1935）。北垣守はその後、鎌倉に在住した。弓道は竹林派で、号は静水という。（小野崎2003）。最晩年には長男の在住する函館に身を寄せ、1942年（昭和17年）死去した。書簡から、子息の結婚予定、許嫁の勤務先など周辺情報もわかっている。

(7) 総合考察：我が国における心理学者の「児童の相談」の始まりと展開

北垣守は財力ある「明治後期人」であり、関心はぴたりと明治以来の『児童学』のそれに収まる。若き日に世界を視野に入れて商業の世界に飛び込み、洋行、留学時に会った児童学思想に共鳴した。銀行員として勤め始め、北海道に渡って外国との交易を目指して努力するが、残念ながらその方面で成功を収めることはできなかった。明治時代の価値観と父国道の考えの強い影響下にあり、国の行く末や国民のありようについて関心を向けた。陸軍軍人として日露戦争に出征したが負傷し、京都に戻って療養後、結局、銀行は辞することになる。この後は父国道の下で秘書として働き、高齢の父に同行し、あるいは代わって諸般の連絡、伝達の仕事をした。また要人の病氣見舞いや葬儀の代参などを務めて京都、東京、北海道を足繁く行き来した。勤勉に務めを果たしたと言えるだろう。しかし、40歳まで「何者か」であったことのない点、ひ弱さが感じられる。児童教養研究所（目黒）は父国道の死後、「何者かであろうとした」北垣守の自我確立の試みであり、自立を目指した活動であった。若き日からの思いを胸に文化人類学的関心に基づく資料収集、児童研究、児童教養の研究を率先して進めようとした。専門的な学術分野については教育を受けておらず、一般人レベルの発想で限界はあったであろう。しかし、そこには明治中期以降、列強に伍して国力を強めたいという国家の意思を国民レベルで受け止めて邁進した人間の姿が見える。

松本園子（前掲）は研究所の雑誌『児童』創刊号に掲載された北垣守の、研究所の理念に触れた力強い文章に感銘を受けながら、しかし、その後の研究論文でそれを受け継ぐものが見当たらない、「研究所関係の文献には、児童研究運動との関係にふれたものは見いだせず、児童研究運動がここでどのように意識されていたのかについては明らかではない。」という重要な指摘をしている。これに対し、村田（前掲）は個々の研究論文ではなく、雑誌、出版物全体でその精神が受け継がれているのであり、「事業そのものが当時の児童研究運動の中で生み出されたものであり、それを『体现』したものといえるのではないだろうか」と答えている。これは端的に言って、北垣守が明治時代人であり三田谷と久保は大正時代人（生まれはもちろん明治時代であるが、社会で活躍した主要な時期が大正期以降）であるということからきている。関川夏央（2003）は「明治15年（1882）生れ以後」を第二世代とした。それは幼少時に漢学の訓練を受けなかった世代である。久保は1883年生まれ、三田谷の方は1881年生まれであるが、いずれも我が国で児童学の研究に着手した第一世代（心理学者元良勇次郎、医学者富士川游）の弟子で、児童研究を実地に拮げた世代である。児童中心主義、大正自由主義教育、さらに童心主義である『赤い鳥』が花開くその時代のほんの少し前から活躍し始めた人たちである。富国強兵のため、列強と伍して戦うために日本男子の体格を改良し、児童の精神の教育の重要性を訴えた北垣守と、母親の愛情、家庭教育を重視し、気がかりな子どもの相談に尽力した三田谷啓、久保良英の眼差しの違いには時代背景が深く関与しているものと考えられる。

おわりに

児童教養研究所（目黒）の取り組みは長くは続かなかった。経営についてのアマチュアリズムの限界と言ってもよいかもしれない。財政面で運営見通しの甘さがあったであろう。しかし、北垣守のおかげで独ミュンヘン（三田谷啓）と米国マサチューセッツ州ウースター（久保良英）の児童研究と思想が目黒で出会うことができた。

三田谷は就任翌年には目黒を去り大阪市の児童課長に赴任して、我が国初の公立児童相談所の開設に邁進した。他方、心理学者久保良英は創設者北垣守と理事たちが去る中で、児童文学者巖谷小波の誠実な支援を受けて一家総出で児童楽園と幼稚園を運営し、児童心理研究を進めた。北垣の用意した花器に三田谷の花が投げ込まれ、そして久保の花が添えられた。残念なことに北垣の花器にひびが入り、また三田谷の花は別の花器に移ったが、久保の花がささやかに咲き続けた。巖谷小波が剣山のようにそれを支えた。久保良英の活躍については後編で紹介する。

目黒の児童教養研究所（児童研究所）は短命に終わったが、児童研究所は久保良英に引き継がれ東京市芝白金で研究が重ねられた。近代日本の児童研究、「児童の相談」の最初の1ページを書き出したと言えるだろう。

表 5 児童教養研究所（目黒）関係年表

1877	明治 10		北垣守、北垣国道次男として誕生。
1891	明治 24		巖谷小波、少年小説『こがね丸』を発表、好評を得る。
1897	明治 30		北垣守、京都府京都商業学校を卒業。
1902	明治 35		心理学者元良勇次郎、児童学者高島平三郎ら、日本児童研究会を発足させる。
1904	明治 37		日露戦争勃発。北垣守、軍入営（大津補充大隊所小隊長 :27 歳）。
1905	明治 38		巖谷小波、三越百貨店『流行研究会』で新渡戸稲造、黒田清輝、森鷗外など著名文化人とともに活動。
1909	明治 42		児童用品研究会発足、巖谷小波、高島平三郎ら。 三越百貨店、第1回「児童博覧会」。4月1日から1ヶ月間開催された。 久保良英、東京大学文科大学哲学科（心理学専修）卒業。
1911	明治 44		倉橋惣三、「心理学的臨床につきて」で米国臨床心理学の現況を児童研究第15巻で紹介。
1912	明治 45		日本児童研究会、日本児童学会に改称。
1913	大正 2		久保良英、米国クラーク大学へ留学。後に Ph.D. を得る。
1914	大正 3		三田谷啓、1911 年以来、独ミュンヘンにてクレペリンの下で学んで帰国。
1915	大正 4		巖谷小波、『桃太郎主義の教育』刊行、東亜堂書房。 児童教養相談所（西片町）開設。三田谷啓、主任となる。
1916	大正 5		北垣守父、北垣国道死去。榎本家、北垣家、北辰社を地元小樽の事業者に譲渡。 久保良英、米国留学から帰国。 北垣守、児童教養研究所の名義で「南洋北海博覧会」を京橋区南伝馬町の大同生命ビルで開く。 北垣守、目黒権之助坂下（現、日出高等学校所在地）に私財を投じて児童教養研究所を設立。三田谷啓、研究部長となる。
1917	大正 6	5 月 6 月 10 月	久保良英、『精神分析法』出版。 児童教養研究所（目黒）開所式。雑誌『児童』第1巻第1号発刊。 久保良英、児童教養研究所（目黒）理事及び研究部長（精神）となる。 東京帝国大学教育学講座の実験教育学講師となる。
1918	大正 7	3 月 7 月	三田谷啓、大阪市役所へ赴任。児童課長に就任し、初の公立児童相談所設立を準備する。 児童教養研究所（目黒）、組織変更し、三部門に再編する。「児童研究所」に名称変更。 附属幼稚園開設。 北垣守、研究所を退任。 『児童研究所紀要』第1巻刊行。
1919	大正 8	6 月	児童研究所、目黒から撤収。東京市芝白金の久保自宅に引き継がれる。
1922	大正 11		久保良英、広島赴任。広島高等師範学校教授となる。
1936	昭和 11		『児童研究所紀要』第17巻発行。終刊。
1942	昭和 17	2 月	北垣守、没。64 歳。

* 註 児童教養研究所 (目黒) : 正式名称は「児童教養研究所」であるが、後に触れる児童教養相談所とは名称が紛らわしく、しかも医師三田谷啓が双方にかかわっていることから、北垣守の創設による児童教養研究所を児童教養研究所 (目黒) とし、児童教養相談所はその立地から児童教養相談所 (西片町) とした。

参考文献

- 1) 大日本武徳会 1937 『武道範士教士錬士名鑑』昭和12年 大日本武徳会本部雑誌部
- 2) 巖谷小波 1915『桃太郎主義の教育』東亜堂書房 (桑原三郎編 1977 日本児童文学大系第1巻 巖谷小波集 ほるぷ出版)
- 3) 児童研究所編 1918-1936 『児童研究所紀要』全17巻 (復刻版 津曲裕次監修 1992-1993 『児童問題調査資料集成』8-22巻、大空社)
- 4) 時事新報社 1916 時事新報社第三回調査全国五拾万円以上資産家 時事新報 1916.3.29-10.6. 新聞記事文庫、神戸大学電子図書館
- 5) 塵海研究会編 2010 北垣国道日記『塵海』思文閣
- 6) エレン・ケイ 1900『児童の世紀』(原田実訳 1916 大同館書店)
- 7) 北垣守 1935 田中義雄師範追悼文 八高弓友会編『田中義雄師範追悼録』p137.
- 8) 古浦一郎 1974「久保先生」: 古賀行義編『現代心理学の群像』96-98. 協同出版
- 9) 古浦一郎 1982「久保良英」: 『日本の心理学』刊行委員会編『日本の心理学』38-44 日本文化科学社
- 10) 倉橋惣三 1911 心理学的臨床につきて 児童研究第15巻第1号 12-14.
- 11) 京都府京都商業学校編 1901『京都府京都商業学校一覽』京都府京都商業学校
- 12) 松本園子 1985 児童教養研究所講習録第1回、第2回の解説 児童研究所紀要の復刻版解題: 児童問題史研究会編『児童教養講習録』日本児童問題文献選集第36巻 pp3-28. 日本図書センター
- 13) 村田恵子 1997 北垣児童教養研究所について 広島大学教育学部紀要第一部 教育学 / 広島大学教育学部編 46号 205-212.
- 14) 小野崎紀男編 2003『弓道人名大事典』日本図書センター
- 15) 立命館学誌編集部 1930「弓道部の莊嚴な矢場開き」立命館学誌第134号昭和5年6月
- 16) 三田谷啓 1931『山路越えて』日曜世界社 (復刻版: 1987 大空社)
- 17) 関川夏央 2003『白樺たちの大正』文藝春秋
- 18) 下山晴彦 2001 日本の臨床心理学の歴史と展開: 下山晴彦・丹野義彦編講座臨床心理学第1巻『臨床心理学とは何か』pp51-72 東京大学出版会
- 19) 鈴木朋子・井上果子 2001 日本における精神分析学のはじまり (1): 久保良英の貢献 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援センター紀要 1巻 101-114.
- 20) 安田生命社会事業団編 1969『近代日本の児童相談』川島書店 (再録: 大泉溥編 2009 日本の子ども研究: 明治・大正・昭和・別巻1 クレス出版)
- 21) 読売新聞朝刊記事 1916 (大正5) 年9月17日、5ページ「銀座コダカラ」開所を伝える記事
- 22) 読売新聞朝刊記事 1916 (大正5) 年11月11日、5ページ「児童教養研究所」開設準備を伝える記事
- 23) 読売新聞朝刊記事 1917 (大正6) 年、5月6日、4ページ「児童教養研究所」開所式を伝える記事

資料

巖谷小波日記（複写版：明治大学和泉図書館蔵）

児童研究所編 1918-1922 「親の為」第1巻1号～第6巻6号

児童教養研究所編 1917-1918 「児童」1巻1号～2巻2号、子宝倶楽部編 1918 「子宝」2巻3号～5号

北垣守はじめ一族の書簡（横山大観記念館所蔵）

謝辞

北垣守ほか一族の書簡を閲覧させていただいた横山大観記念館に感謝申し上げます。

北垣守師範について、問い合わせに丁寧に答えて頂いた立命館大学体育会弓道部 OB 会並びに立命館史資料センターにお礼申し上げます。